

外国の文献から

『心情と知性の教育』

―日本の就学前と小学校教育に関する考察―

第三章 小学校での全人格的アプローチ

北村 琴美

日本では毎年、文部省によって日本の教育についての統計的な記録（入学者数、学級の大きさなど）が出されるが、そのなかにはテストの点やその他の学力についての指標は含まれていない。

西欧では、日本の子どもは高い学力をもっている

と、いうことをよく耳にする。しかし、統計的な記録を見ると、日本の教育者は子どもものの知的な発達だけではなく、発達の多くの側面に関心をもっているようである。

この章では、日本の教育の全人格的アプローチ

(学力だけではなく、他の様々な側面から子どもをとらえ、発達を促す) について探究する。

小学校での一日

筆者は、日本の小学校で一日を過ごした。一日の始まりには朝の会が行なわれ、終わりに帰りの会が行なわれていた。授業時間は四十分から四十五分で、その合間に十分もしくは二十分の休み時間があった。授業の始まりや終わりには日直の合図で全員が一斉に挨拶をしていた。授業中は生徒の自発的な発言が多く見られ、整然とした様子であった。一方、休み時間は、友達同士で話をしたり、鬼ごっこをしたり非常に騒がしいが、教師はそれを止めようとはしなかった。教室内には様々な掲示物(時間割表、目標など)が見られた。

一年生の生活における中心的な目標

日本の生徒達は、学校やクラスやグループの目

標が書かれている掲示物の下で学習していた。筆者が観察した十九の日本の一年生の教室には、なんと合計で九十四の目標が貼ってあった！筆者が目にした目標のほとんど半分が、友情、協力、その他の社会的・情緒的発達の側面に焦点を当てたものであった(「友達になろう」「ごめんなさい」「ありがとう」を進んで言える優しい子になろう」など)。子どもの発達の様々な側面についての目標があったが、学力に関する目標は相対的にあまり強調されていなかった(目標全体の八パーセント)。次に、一年生の生活で中心となっていた四つの目標の背景について述べる。

友達・親切・優しい・仲良く

筆者が観察した学校では、「お互いに仲良くしよう」「優しい子になろう」などの目標の下で、フレンドリーな学校を目指している様子が見られた。

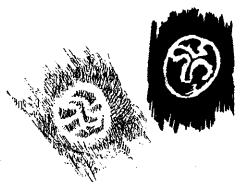
挨拶は、ある小学校の生徒会によって行われた

フレンドリー運動 (freundori undo) の中心であった。他の学校においても、挨拶は重要な目標であった。筆者は、最初、挨拶を重要視することは礼儀作法への関心の表れであると考えていた。しかし、教師は、挨拶について次のように説明した。挨拶は学校の他のメンバーを認識する最も基本的な方法である。笑顔で挨拶することによって、コミュニティの足場ができる。筆者は、五歳の息子が日本の幼稚園に参加するまで、挨拶の重要性について懐疑的であった。「おはようございます」「さようなら」と大きな声で挨拶することは、日本の幼稚園で好まれている形式であった。私の息子は、この習慣を身につけてアメリカに帰国した。内気だった息子が、クラスメートや先生に毎日元気に挨拶をした。私が表面的な習慣であると思っていた挨拶は、実際にはクラスメートや教師達に重要であると感じられ、関心をもたれたようであった。

頑張る・努力・根気

日本の教育や文化の研究者の多くは、日本では頑張る (gambaru) ことに中心的な価値が置かれていると述べている。日本の学生はアメリカの学生より、学力にとって努力がより重要なものであると見なしている。逆に、アメリカの学生は日本の学生より、学力にとって生まれつきの能力がより重要なものであると見なしている。これらの考え方は、学業成績に影響を及ぼす。つまり、失敗に直面した時に、学生はあきらめる (生まれつきの能力が重要であると見なすならば)、もしくは、さらに努力する (努力が重要であると見なすならば) ことのどちらかを選択する可能性がある。

頑張る・努力・根気 (gambaru, doryoku,



konki)は、それ自体が目標となっていることが多かった(「粘り強い子になろう」……)が、子ども達が、それについて考える際には、特定の個人的な目標を選んでいた(「給食を残さず食べた」……)。あらゆる時期(新学期、新しい季節、学期の中間点)に目標を決めている様子が見られ、目標を定めるのにはいつの時期でもふさわしいようであった!

元氣

日本の幼稚園や小学校の先生がしばしば、子どもが元氣(genki)な様子を示すことを促していたことに私は驚いた。休み時間の子どもの様子は、非常に騒々しいものであったが、それでも教師は子どもは元氣であることが重要であると考えていた。

私がインタビューした教師達にとって、子ども達の騒々しさはいくつかのことを意味していた。まず、それは子どもが「子どもらしく——子ども

らしい」という言葉は日本語では英語においてよりも言外に賞賛的な意味を含んでいるようである——活動している」ことを意味していた。次に、元氣な、騒々しい関わりは、子どもと集団とのつながりを示していた。日本の教師達は、集団活動に参加しない子どもを非常に心配する。最後に、活発に動き回することは、自己管理の側面にもつながる。すなわち、子ども達は自由にされるほど、きちんとした状態(秩序のある状態)に戻るのに自己管理の力を多く必要とする。

日本の幼稚園も小学校も、活気が満ちあふれている状態と統制状態が、奇妙に交錯していて、結果として、日本の教育はアメリカの教育よりも自由でもあり厳しくもあると評価される。先にも述べたように、日本の小学校は四十分から四十五分の授業とそれに続く十分あるいは二十分の休み時間がある。意図的にしろ意図的でないにしろ、授業の前の騒々しい自由な遊びは、子どもの自己管

理の実験場を提供しているのである。

自己管理

自己管理に関する目標は大別すると次のようになる。一つは「自分のことは自分でする」などの一般的な目標であり、もう一つは「時間を守りましょう」「机の中の整頓」などの特定の課題である。観察したすべての教室に、子ども達の自己管理を助けるために作られた図表（時間割表、机の中の整理の仕方、係のメンバーと仕事など）があった。子ども達は、時間割表を見ながら次の授業の教科書やノートを用意したり、体操着に着替えたりしていた。ほとんどのクラスでは、少なくとも一日に一回、生徒達は、クラスの庭に水をあげたか、机の中は整頓されているかなどの何らかの責任について反省していた。

教室内にコミュニティを形成すること

すでに見てきたように、日本の小学校低学年の

教室には明確な価値観が存在し、それらの価値観を話し合ったり、毎日の生活に当てはめたりする多くの機会が生徒達に与えられている。しかし、何によって生徒達は、これらの価値観に関心を向けるようになるのか？ 教師達はまとまり（matomari）意識や所属意識によって、生徒達が学校の価値観を受け入れるようになることを強調した。まとまり意識を生み出す方法として、主に次の三つのテーマが挙げられた。①生徒間の友情関係を築くこと ②学校の規範を作る際に、生徒達を積極的に巻き込むこと ③生徒達がお互いに責任感を発達させること。②③は、五、六章の中心的なテーマであるので、ここでは所属意識を築くために計画された学校・クラス活動について触れる。

新年度になると、日本の教育者向けの雑誌は、

“学級作り（gakkyuzukuri）”についての記事でいっぱいになる。記事は、生徒達がお互いに知り合いになるような機会や、一緒に楽しく遊ぶ機

会などを与えるように教師を促している。私が行ったインタビューの中で、一年生の最初の月に生徒達が学ばなければならない技能や態度として学問的な技能を挙げた教師が誰もいなかったことに私は驚いた。三分の二の教師が、生徒間の友情や連帯感を挙げた。また、教師とそれぞれの生徒とのつながりも新入生にとって重要であると述べた。家庭訪問、一分間スピーチ、日記、毎日の授業などを通して、生徒―生徒、生徒―教師の関係が築かれていた。

日本の教員の初任者研修についての研究によると、絆 (Kizuna―教師と生徒の間の結び付き) がよい教育の中心であると見なされている。初任者研修では、この結び付きの構築が技術的な能力よりも優先されている。

また、他の研究者は、小学校低学年の日本の教師は、授業を個人個人に合わせていると述べている。個々の子どもとのつながりに注意を向けるこ

とは、集団主義や体制順応で知られている日本社会においては矛盾しているように見える。しかし、教師達はそのことについて私に「グループを育てるためには、個人を育てなければならない」と説明した。

すでに触れたように、日本の教師は、生徒の知的発達ばかりではなく、その生徒自身の人格発達にも関心を示していた。しかし、知的発達と人格発達の間を区別することは、日本的というよりも西欧的であるのかもしれない。アメリカ人がもっている「知的な人」の概念と比較して、日本人の概念は、共感、他者の観点をとれる能力、謙虚さなどを重視している。学習についての日本での様々な研究によると、人格発達と学習は分離できないことが示されている。

教育信念と態度についての大規模な比較調査 (日本、オーストラリア、韓国) の結果を見ても、日本の小学校の教師は、子どもの人格的、社

会的発達に特に関心をもっていることが示されている。

また、日本の親と就学前教育の教師は、学校教育に必要な子どもの基本的な習慣と動機づけを育てる責任は、家庭ではなく、学校にあると考えていることも示されている。

日本の小学校の教師達は、クラスを越えて学校全体に広がる共通意識を築くために努力している。筆者が観察したいくつかの学校では、学校全体の行事の前には、その準備に多くの時間を費やし、学校全体が活気づいている様子が見られた。

いくつかの学校の教師達から学校行事についての話を聞いたところ、それらの話は次のような共通のメッセージをもっていた。ばらばらだった子ども達が、行事への参加を通して一つになった、学業とは関係のない共有された体験によって、生徒、職員、管理者がお互いを“人間として”見ることが促進された、学校行事の結果として、学校に

まとまりがでてきた。

学校行事は、日本の学校において結束力を作り上げるといふ重要な意味をもっている。

親の役割

日本では決まった日時に授業参観が行なわれるが、アメリカのように親が非公式に学校を訪れる機会はめったにない。日本の教育者は、教室から親を排除する重要な理由をもっているのかもしれない。子ども達は、密接した、甘えた親子関係からの自立を確立する必要がある、教室に自主的に数人の親がくると、子ども達の間で不公平が生じる。子どもとの様々な関係の仕方をもつ親たちは、教師によって注意深く作り出された教室文化を脅かすものとして見なされるかもしれない。日本の学校はしばしば子どもの扱いにおいて驚くほ



ど寛大であるように見えると同時に、驚くほど親

の要求を受け入れないように見える。例えば、働いている親にさえも、お弁当や手作りのものを準備するように要求する。そして、手作りのものが子どもへの愛情の印であるかのような説明を親に行う。日本の教師は、親の関わり合いや考えを歓迎するというよりも、自分を権威者として位置づけようとしているのかもしれない。親が、教師に自分の考えを言うことはあまりない。子どもが非常に混乱している時でさえ、親は教師に自分の悩みを訴えることを躊躇することがある。このように親が控え目な態度をとるのは、次のような信念が広く共有されているからかもしれない。つまり、親子に強い感情的な結び付があるために、親は子どもの要求を客観的に判断することが不可能であるという信念である。あまりにも、日本の親は教師の力——学校の記録に好ましくないコメントを書く——によって脅かされている可能性がある

る。

日本の教育の成功はどの程度までこのような親の謙虚さに基づいているのだろうか。日本の教師の仕事は、教師の要求に応じて親が準備することによって楽になっている。アメリカの親であつたら、ほとんどの親がやらないと思われること——決められた日までに、百以上の持ち物に名前を記入する——を日本の親は容易にやってくれる。日本の親は、自分と子どもとの相互作用スタイルを教室に持ち込まないので、日本の教師は、約束したクラスを作ったり、一貫したしつけのアプローチを用いることが比較的容易であるかもしれない。

しかし、日本のシステムの長所と学校への親の関わりは、両立しないものではないだろう。そうすることによって、日本の教育はもっとよくなる

と考える。

(お茶の水女子大学大学院)